

ハイデルベルク信仰問答より

問 26 「天地の造り主、全能の父なる神を信ず」と告白するとき、あなたは何を信じているのですか。

答え 天と地にあるすべてのものを無より創造し（詩篇 90:1-2、イザヤ 44:24）、その永遠のご計画と摂理によって、それらのものを支え、治められる（マタイ 10:29）私たちの主なるイエス・キリストの永遠の父が、御子キリストのゆえに、私たちの神であり、父である（ローマ 8:15-16）と信じているのであります。// 私は、この方をかたく信頼していますから、身と魂のために必要な一切のものを、私に備えてくださることを、決して疑いません（ルカ 12:22）。さらに、この悩み多い世において、私に与えられる禍が何であれ、私の益としてくださる（ローマ 8:28）ことを、決して疑いません。なぜなら、神は全能の神でありますから、それをなさることができ、また、真実なる父でありますから（マタイ 7:9-11）、それをなさろうと決意しておられるのであります。

今日は問 26 の後半部分を学びます。ここには、告白者が意識的に（自分に言い聞かせるかのように）語っている二つの動詞があります。

①信頼しています

②疑いません

まず「信頼」という事柄について考えてみましょう。神を信頼するとはどういうことなのか。見えない神を信頼して生きるということは、この方に頼っていれば自分の地上の生涯も永遠のいのちも、もっと広くは歴史の行く末さえも間違いはないと信じることでしょう。ここでは「身と魂のために必要な一切のものを、私に備えてくださる」と告白されています。

《根拠とされている聖句》

・ それから弟子たちに言われた。「だから、わたしはあなたがたに言います。いのちのことで何を食べようかと心配したり、からだのことで何を着ようかと心配したりするのはやめなさい。」（ルカ 12:22）告白者がこのように信じる理由は、先に学んだ神の「摂理」にあるでしょう。摂理とは、「神が善い心をもって世界を支配しておられるという信仰」です。神が計画なさることはすべて善く、目の前に起きていることがどんなに悪く見えようとも、最終的には神の最善に至るという約束です。「天地の造り主」を信ずるというところには、その「天地」の一部に自分も含まれていることを信じているのです。

しかし、問 26 の後半部分だけで二度も「疑いません」という言葉が出てくるのが気になります。「疑わない」という言葉の背後には「疑い」の存在が隠れているとも言えるでしょう。告白者は現実に対する不安ゼロで「私の中には疑いなんてものはありません」と能面にモノを言っているわけではありません。「この悩み多い世において、私に与えられる禍が何であれ」と言っている

ように、彼／彼女は地上の生涯において次々と降りかかってくる苦悩と闘いながら、「それでも私は神を信じる」と告白しているのです。

《根拠とされている聖句》

- ・ **神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。**（ローマ 8:28）

これは摂理を信じる信仰、神を父として持っているがゆえの信仰です。「全能の神」「真実なる父」という二つの呼び方の内にも、「創造主」と「贖い主」という、偉大な神と罪人とをつなぐ要素がしっかりと含まれています。そう、信仰者は御子イエスにおいて全能の父なる神と契約を結んだのです。

私たちが神を信頼すると言うとき、誤解してはならないのは、それによって自分の心からすべての疑いがなくなるのではないということです。神は私たちが自覚する以上に、人間の心が如何に脆く揺れ動きやすいものであるかをご存知です。悲惨な現実には苦しみ、問題に押しつぶされそうになり、「神の御心とはどこにあるのか」と叫び出すこともあるでしょう。しかし、信仰者はそれで終わってしまうことはありません。「それでも私は信じます」「なぜなら神は真実なる方だからです」と尚も告白し、疑いを超えていくのです。

- ・ **信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。**（ヘブル 11:1）